

Title	秘伝書哀史：将軍たちと世阿弥との間
Sub Title	The tragical history of Zeami's secret papers
Author	中山, 一義(Nakayama, Kazuyoshi)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1971
Jtitle	哲學 No.57 (1971. 3) ,p.187- 217
JaLC DOI	
Abstract	This thesis is the history of the latter half of Zeami's life, and the tragic story of his secret papers, with which he initiated his successors into the secret. The tragical events, in succession, have come from the conflicts among three elements as follows, (1) the personal patronage of three persons of the Ashikaga Shognate, Yoshimitsu, Yoshimochi and Yoshinori, (2) Zeami's individual authority on the No-drama, (3) the tradition of initiating sons and pupils into the secret. In his last years, his second son entered the priesthood, the eldest son died early death in his thirties, his grand son was left as a child, his company nearly collapsed, and he himself, at the age of seventy-two, was exiled on the northern solitary island, Sado-gashima. In the latter half of his life, however, Zeami had left secret papers, about twenty volumes in number, which were what you would call his will. These secret papers have kept alive to this day during six hundred years since his death.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000057-0187

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

秘 伝 書 哀 史

— 将軍たちと世阿弥との間 —

中 山 一 義

目 次

秘 事 矛 盾……………	187	史 書 哀 歎……………	188
観 阿 庭 訓……………	189	世 阿 伝 書……………	190
元 雅 非 運……………	193	禅 竹 拾 玉……………	194
役 々 習 道……………	195	元 能 聞 書……………	197
悲 傷 未 練……………	198	鳥 跡 不 朽……………	199
秘 伝 書 奥 書 識 語 抜 書……………	201		
秘 伝 書 年 表……………	206		

秘 事 矛 盾

「秘すれば花なり，秘せざれば花なるべからず」という『花伝書』別紙口伝の一句は，秘事の秘密を語ってあますところがない。芸能のおもしろさ（花）は秘すところにある。秘事の公案を解せぬ人は，芸道の達人となる資格に欠ける。

しかし，単なる表出がおもしろくないように，単なる秘事は花ではない。秘すべき時と所をこころえて，秘すべきを「秘すれば花なり，秘せざれば花なるべからず」というのである。

秘事は矛盾のうちに花と咲く。他人に秘するだけでは足りなくて，やが

て、己れにも秘する公案を打ち出す。自他に秘する秘密の園に、芸能の花は咲く。

「命には終りあり、能には果てあるべからず」と世阿弥は『花鏡』の奥段にいう。ここに芸能的生命の秘伝の矛盾がある。花の命が生きつづけるためには、個人の生命の有限を超えて、永遠に相伝されなければならぬ。有限な個人から有限な個人へ相伝されて、芸能的生命は無限に生きつづければならぬ。

秘伝はその時、さらに矛盾を重ねる。「家家にあらず、継ぐをもて家とす。人人にあらず、知るをもて人とす」(『花伝書』別紙口伝)。秘伝は許さるべき人には、実は秘事ではない、公開されてあるのである。

しかし、現実の秘伝の歴史をみると、上述のように、理論通りにいかぬ。対立抗争するいろいろな力が、そこに働いて、哀歓の歴史をくりひろげる。わたしは、世阿弥が書き遺した秘伝書をめぐって展開する抗争の跡をたどって、秘伝の哀歓の歴史を書いてみたい。歴史の真実は悲劇味を帯びるという。よろこびの深いところ、悲しみも大きい。それを生きぬくところに人の世の実相が見いだされる。秘伝の歴史も例外ではない。

史 書 哀 歓

人の世の哀歓はどこから来るのか。ひとはその根源を生きんとする意志だという。その由来を執念の葛藤相剋だという。

秘伝書をめぐってくりひろげられる哀歓の歴史には、すくなくとも三つの力がはたらいている。芸能を創作せんとする執念、これが一つ、道執と名づける。創作した芸能を永く伝統せんとする執念、これが二つ、家執と名づける。芸能をパトロネージせんとする、時の権力者の執念、これが三つ、権執或いは名誉執と名づける。これら三つの力の葛藤が一編の哀歓の歴史を織り成す。

応安七年、四十五才の観阿弥が、十二才の鬼夜叉（世阿弥の幼名）と、京都今熊野で演能し、足利将軍義満がはじめて観能した。義満はそれ以来、猿楽能のとりことなり、観世父子のパトロンとなる。したがって、猿楽能の歴史では、これを劃期的事件という。それまでは寺社祭礼に奉仕する田舎まわりの芸能であった。この事を歴史的に分析すると、いろいろ興味あることがわかる。主なもの三つ四つを挙げてみる。

一、すでに観阿弥たちの手で、猿楽が大成していたことがわかる。義満がこれを観る気になったのも、評判が高かったからである。

二、観世父子がみとめられ、大和猿楽座抬頭の時代がくる。かくして、他の座や田楽能の衰退廃滅の歴史がはじまる。

三、このころ足利政権が一応確立し、義満の北山文化が成立し、その文化を飾る学芸の一つとして、能楽が登場する。そしてそれまで寺社や庶民のものだったのが、後に武家式楽となるキッカケができる。

四、かくして、義満・義持・義教と将軍交替の度毎に、座運の浮沈する哀歎の歴史が、世阿弥八十年の生涯にわたってくりひろげられる。

観 阿 庭 訓

『花伝書』七篇は、観阿弥のものか、世阿弥のものか。第三問答条々の奥書（資料一）には、「亡父の申し置きしことども」とあり、第五奥儀云の奥書（資料二）には、「およそ花伝の中、年来稽古より始めて、この条々を注す所、まったく自力より出づる才学ならず。」とあるのを見ると、観阿弥のものといわざるを得ないが、二十二才で父に死なれた世阿弥自身のその後の体験が入り込まないはずはない。第五奥儀云の奥書（資料二）に、「幼少より以来、亡父の力を得て人となりしより、二十余年が間、目に触れ、耳に聞き置きしまま、その風を受けて、道のため、家のため、これを作るところ、わたくしあらむものか」とあるのを見ると、父の訓にプラスアルファのあるらしいことも推察できる。しかも、実際には聞書のように

なメモがあって、それをもとにして、恐らく書いたものであろう。文章そのものは何としても世阿弥のものであるから、結論的には、『花伝書』は、観阿弥のものであると同時に世阿弥のものだというべきであらう。切りはなせないところに特徴があるのだ。

第一年来稽古条々，第二物学条々，第三問答条々，第四神儀云，第五奥儀讚歎云，第六花修云，第七別紙口伝，以上七篇を合本完備した伝本が後世の合写本以外には存在しないということであるが，その成立は一度に出来たのではないけれども，三十数才頃から四十数才までの（年表），数年間に書いたもので，内容と構成の上から見ると，七篇は切りはなせない，一つのまとまったものである。すなわち，生涯稽古を説く第一，物まねの要領を説く第二，七ヶ条の問題学習を問答形式で説く第三が正篇，能の寿福増長を説く第五が後篇，能の沿革を説く第四は第五の序に当る。第六は能の作り方，第七は，本来は口伝たるべきことを記憶のあやまりを避けるために，切紙きりがみに書いた秘事である。だから，奥書には，「当芸に於て，家の大事，一代一人の相伝なり。たとひ，一子たりといふとも，無器量のものには伝ふべからず。家，家にあらず，つぐをもて家とす。人，人にあらず，知るをもて人とす」と書いて，「これ万徳了達の妙花をきはむる所なるべし」と訓おしえている。そういうわけで、『花伝書』七篇は，能という窓を通して見た芸能世界の全体にわたる秘伝書といってよかろう。

観世父子二代で，古代からの諸芸能のよいところをとり集めて猿楽能を創り上げ，さらに，それを後世に伝えるために，すばらしい理論を考え出した。自分たちの創作したものを永遠化するには，理論が是非とも必要であることを，観世父子はこころえていたからである。その理論をたくみな仕組と，美事な文章で表出したのが，この『花伝書』七篇である。

世阿伝書

「観世小次郎画像賛」によると，世阿弥は嘉吉三年八月に亡くなってい

る。享年は八十一であり、西暦では一四四三年に当る。

世阿弥が十二の歳に、若き將軍義満（十七歳）に見出され（年表）、爾来義満の死まで、三十五年の長きにわたって、その愛顧を受けた。父観阿弥が五十二歳で亡くなり、二十二歳で一人立ちしたが、世阿弥の天才は、義満の庇護の下に花開き実を結んだ。他の申楽座・田楽が、やがて衰退して行ったのに、大和申楽のみが、栄えたのもその為であり、能楽が二十世紀の今日まで、数百年も生命を持続し得たのもまた、世阿弥の天才と義満のパトロネージのお蔭である。

世阿弥は一生の間に、数々の秘伝の書を書き遺した。現在二十種程の伝書がわかっている。その中で、最も有名な『花伝書』七篇は、四十歳前後の数年間に書かれたもので、勿論義満生存中のことである（年表）。『花伝書』は前述したように、父の訓えの祖述という意味で、ほかの伝書とは区別されるべきである。次いで、義持將軍の時代が来る。世阿弥が四十六から六十六の二十年間である。義持は田楽能を愛好したので、世阿弥は権力の庇護からやや離れた形にはなったが、その人気は依然衰えを見せなかった。六十歳で出家して、法名を至翁善芳と名のり、長子元雅に観世大夫を譲り、第一線を退いた（年表）。

この年を中心に、前後十数年間（年表）に、十数種類の秘伝書を書いている。『花習』、『音曲声出口伝』、『至花道』、『二曲三躰人形図』、『能作書』、『花鏡』、『曲附次第』、『風曲集』、『遊楽習道風見』、『五位』、『九位』、『六義』、『拾玉得花』、『五音』、『五音曲』。丁度この頃、長子元雅のほかに次子元能、甥の元重（弟四郎の子、後の音阿弥）、女婿の金春氏信（禪竹）など、若い後継者達が成長して、観阿弥、世阿弥父子二代で大成した芸能を引継ぐ態勢が整っていた。前の『花伝書』は、既に弟四郎並びに元次（元雅の前名？）に相伝しているが（年表、資料三）、この期間に書いた伝書類は、これらの若き後継者達に相伝する目的で書かれている。だから、これらの伝書は内容も目的も、一つ一つそれぞれ異っている。伝書の中には、

誰に相伝したか明記されているものもある（年表、資料五、七、八、九、十）。

このままゆけば、悲劇は起らなかったかも知れない。わたしにはそう思われる。ところが、義持が応永三十五年（一四二八）に死んで、弟の青蓮院義円が還俗し、やがて將軍義教となるや、事態が急変した。世阿弥が六十七以降のことで、このあたりから、はっきり悲劇味が感じられて来る。義教という権力者の異常な性格がそれを生んだ^{もと}因か。（しかし、ひるがえって考えると、かつて世阿弥が栄え、他の座が衰えたのを見れば、歴史は繰返えすというべきか）。

従兄弟同士の元雅と元重とは、年頃も同じ、芸の上でも良い競争相手だった。二人の間には、始め暗い影は無かったように思う。ところが、義教の出現で事情は変った。元雅の背後には世阿弥という芸能上の権威があり、元重の背後には、義教という政治上の権力が居た。争いにならないこの対立は、勝敗の^{すう}数は闘わずして明らかであった。義教は元雅の公職や地位を次々に剝奪して、これを元重に与えた（年表）。世阿弥は、座運の危殆を予感して、『習道書』を書いて、一座連人の結束を要望し、協力合を説いた（年表、資料十一）。

しかし、急坂を下る勢は止まるべくもなく、これをうれいて、次子元能は『申楽談義』の聞書を急遽まとめて、これを形見として出家を申し出て実行した（年表、資料十二）。

元雅は^{てんのかわ}天川神社への祈願も空しく（年表）、永享四年八月一日、窮迫の極、旅先で急死した（年表）。^{よわい}齡七十にしてこの悲運に遭遇した世阿弥は、翌九月、追悼文『夢跡一紙』を認め、^{したた}若き元雅の死をいたみ、老いたる自己の絶望を語っている。

翌永享五年三月、口伝のみであった「却来花」の秘伝の名を書遺して、元雅への未練の情を語り、本風の真義を説いて、正しき芸統のあるべきすがたを示す（資料十三）。

義教の世阿弥への追咎^{ついきゆう}は、永享六年世阿弥七十二の歳、佐渡流配の命令に至って窮まる。しかしながら、配所で世阿弥が書いた『金島書』（年表、資料十四）と禅竹への手紙には、悲しみや未練は既に消え去り、澄み徹った諦念が見られる。そこにあるのは、芸道を楽しむ強い心情と、その不朽を疑わない堅い信念とである。

流謫八年目の嘉吉元年、世阿弥七十九歳の時、將軍義教が赤松満祐に誘殺された。世阿弥はその後間も無く赦されて帰り、嘉吉三年、波乱の多かった生涯を閉じた。

元 雅 非 運

世阿弥の長子元雅は悲劇の人である。永享四年伊勢の安濃津で客死しているが、四十以前というだけで、死歿の年令さえはっきりせぬ。したがって、年表にあるのは推定である。従兄弟の元重（後の音阿弥）や、義弟の禅竹の生歿年次がわかっているのに、元雅のはっきりせぬのは、どこまでも非運の天才である証拠である。

この非運の天才も、はじめから不幸であったのではない。世阿弥の長子として生れ、祖父観阿弥にもまさる芸人として、父の期待を一身にあつめ、世阿弥が応永二十九年出家した年、後をついで観世大夫となったのは、推定で二十八位の歳であった。二年後の四月には、醍醐寺清滝宮の楽頭職に任ぜられた。才能もあり、毛並みもよしというわけで、当時の芸能社会では、よきパトロンの後援さえあれば、前途は洋々たるはずのところ、元雅にはこの最後の条件が欠けていた。非運の原因はそこにあった。

父の世阿弥は二十二で父を亡くしたが、義満というパイロンがいて、その死まで二十数年間の愛顧をほしいままにすることができた。元雅には父は出家こそすれ健在で、その点では心強かったが、権力者のパトロンの後楯がなかった。そればかりではなく、南都青蓮院義円という將軍義持の弟をパトロンにもつ元重という従兄弟のライバルがあり、義円が義持の歿後

還俗して、永享元年三月義教將軍となるや、元重への偏愛は、元雅への重圧となつてのしかかつてきた。永享元年三月には仙洞御所への出入を禁止され、翌二年四月には、清滝宮楽頭職も免ぜられ、その後任に元重が命ぜられた。その年の十一月吉野の天川神社（義満の再建）に能「唐船」と、使用した阿古父尉の面を奉納し、座運挽回を祈願した。しかし祈願の甲斐もなく、同四年八月一日伊勢の旅先きで急死した。時に世阿弥は齡七十、孫は幼く、一座は破滅したも同様であった。そしてこの年ライバルの元重が観世大夫になっている。

「おもしろうてやがてかなしき」、という文句があるが、元雅の生涯はそれに近い。天性の才能と世阿弥というその道随一の後楯をもち、秘伝のすべてを許され、はなばなしくスタートしながら、中途にして、將軍の交替という不可抗の変化によって、非運な生涯をおえた。観阿弥世阿弥の芸跡は、ここに無主無益の塵煙となったとって世阿弥は悲嘆した。

非運の人元雅は、また、詞藻の人でもあった。「隅田川」「盛久」「高野物狂」「弱法師」などすぐれた謡曲をのこしている。その作品はいずれも哀愁の曲であるのは、その性格からくるものか。ライバルの元重がもっぱら舞台に生きた人であり、作品を残していないのは、これまた、対照的である。

禪 竹 拾 玉

禪竹は世阿弥の女婿である。禪竹は応永三十五年閏三月『六義』を、同年六月『拾玉得花』を相伝されている（年表・資料十）。それは二十四の歳で、おそらくこのころ婿となったものであろう。奥書によると、前者は「所望により」後者は「見所あるに依り」相伝すると書いてある。さらに『却来花』を見ると、元雅も生前、禪竹を見込んで、『花鏡』を一見させているらしい。このように見てくると、金春と観世と座こそ異なれ、女婿の

縁もあって、秘書の多くが金春に伝った因縁を知ることができる。

そればかりではない。後にも述べるように、永享元年義教が将軍となり、元雅の座が衰運におもむくと、翌年次子元能が出家し、二年後永享四年には元雅が急死し、さらに一年置いて永享六年に世阿弥が佐渡に流されるや、女婿の禅竹が残された世阿弥の老妻の世話をしたり、配所の世阿弥に扶持（援助）したりする廻りあわせになって、世阿弥も禅竹を頼るよりほかなくなっている。この線からも、秘書が金春に流れた因縁を推察しうる。

しかし、もっと大事なことで見のがしえないのは、禅竹自身の理論好きな性格が、世阿弥の創り上げた理論をまともに受けとめて、後年さらに展開させている点である。

この点から、わたしは近頃発見された『拾玉得花』の問答体の記述様式に眼をつけ、禅竹の問いに対して、世阿弥が答えたものではなからうか、と推量してみた。この推量が当を得ているか否か、今後の研究に待ちたい、と思っている。

役 々 習 道

義教将軍の元重への偏愛は、世阿弥・元雅父子の仙洞御所への出入禁止の命となってあらわれた。永享元年五月十三日のことである。

これより前、三月正式に将軍となった義教は、五月三日室町殿御所の笠懸松の馬場で猿楽能を催させた。元雅・元重の従兄弟が合流して一手となり、宝生大夫と十二五郎が合同して一手となり、表面は観世・宝生両座の競演という趣向ではあるが、実は元雅と元重との競演であった。当日は野天の馬場が舞台となり、本当の馬と甲冑を用いた珍しい興行であったという。それから十日目、仙洞御所への出入が差し止められたのである。その理由は、後小松法皇が、世阿弥・元雅父子の評判を聞かれ、御沙汰があったのを、義教が法皇のおぼしめしの観世大夫を元重と早合点してお引受

けしたところ、元重ではなくて、世阿弥父子であったと知って、御所への出入禁止の命令を出したのである、という。

このころから衰運のきざしがみえはじめた。世阿弥はおしよせる不安を予感してか、翌永享二年三月『習道書』を書いて、一座連人に示した。一座の自戒と和合を説いためずらしい形式の伝書である。

この書の序の書き出しに、「申樂一座人数；其役々習道次第」という副題がついている。その趣旨は次のようなものである。

演能に参加する役々、棟梁の為手・脇の為手・鼓の役人・笛の役者・狂言の役人は、それぞれ習得した技倆を發揮すべきことはいうまでもないが、別に考えなければならないことがある。それは、一座の能を成功させるには、役々の芸がうまく和合しなければならないということである。一同の気持が揃わなければ、役々がそれぞれ立派でも、和合から生れるおもしろさの成功は得られない。それ故諸役が助け合う精神で、演ずる心がけが必要で、それには、自分一人だけの芸をやるのだと考えてはならない。一座の中心たる為手を助けて、和合のおもしろさが生れるようにところがけなければいけない。

このような主旨を説いて、さらに、諸役の心得べき細目をそれぞれ懇切に示している。秘伝書といえ、伝授する相手はひとりが普通だが、これは変った形式の伝書である。

『習道書』で気をついたことが一つある。それは笛の達人^{めいしやう}名生の伝を記した一節の末尾に、^{おさまれるよのこえは やすんじてもてたのしめり}「治世之音、安以樂」という毛詩の大序の句を引用していることである。『習道書』とほぼ時を同じくして書いた『五音曲』には、同じ句につづく文言をも引用している。

おさまれるよのこえは	やすんじてもてたのしめり	そのまつりごとやわらげばなり
治世之音、	安以樂、	其政和、
みだれなんとするよのこえは	うらみてもていかれり	そのまつりごとそむけばなり
乱世之音、	怨以怒、	其政乖、
ほろびなんとするくにのこえは	かなしみてもておもえり	そのたみくるしめばなり
亡国之音、	哀以思、	其民困、

かるがゆえに とくしつをただし てんちをうごかし きしんをかんぜしむ
 故 正 得 失, 動 天 地, 感 鬼 神

この引用を見て、時勢に対する世阿弥のこころの内側をのぞきみたような感をもつのは、わたしひとりだけであろうか。

ちなみに、後述の『金島書』の小謡の一つにも、その謡い出しのところに、『習道書』と同じ句を引用している。

元 能 聞 書

淡い一生というものがある。世阿弥の次子元能の生涯がそれである。生きることは闘いなりと観念し、そこに生きがいを感じるものがある。その反対の人が、ここにいう淡い人である。さらりと闘争場裡に背をむけて淡々と去って行く。後姿に未練げがすこしもない。うらやましいくらいである。問題は能力の有無でもなく、道への執念の強弱でもなく、その濃淡であり美醜である。

元能にかけた世阿弥の期待は、よき能を作ることにあった(資料七)。『能作書』を相伝し、『申楽談義』の聞書を命じていることから察することができる(資料七・十二)。『申楽談義』における父と子との意気は、ピタリと合って水ももらさぬ。元能の父への傾倒は奥書を見ればよくわかる(資料十二)。

右、三十一カ条の聞書にあやまりはないつもりですが、聞きちがいがあ
 るかもしれません。懸命にやった証拠をお見せしたいので、これを書
 きました。ご覧になりましたら、お焼きすて下さい。

このように記した後に、父母に一首ずつ歌をささげている。

たらちねの道の契りや七十路ななそじの老まで身をもうつすなりけん
 ははそ原かけ置く露のあはれにもなほ残る世のかけぞ断ち憂き

そして最後に、この聞書をかたみに残して、出家する決心であることを歌

によんで、

おんをすてむいにいるは おんをすてむいにいるは 棄 恩 入 無 為、 しんじつにおんをほうずるものなり 真 実 報 恩 者

たちかへり^{のり}法の御親の守りとも退く^ひべき道ぞせきなとどめそ

と記している。ここに読みとれるのは、執念の淡い美しさである。淡さはけっして弱さではない。弱いだけではあの大部の『申楽談義』は生れない。三首の歌に、淡々とした執念の後姿の美しさを読みとるものにさいわいあれ。

後年、元能は再び越智観世座の役者として活動しているらしい。執念がなかったのではない証拠である。ただ、出るときも、引くときも淡々としているのである。

悲 傷 未 練

『夢跡一紙』は、中世秘伝の悲劇をうたった一篇の詩である。長子元雅の急死は、七十才の世阿弥をうちのめした。子の早世を悼むこの文は、字数にして七百足らず、悲痛の詞藻は読むものの涙をさそわずにはおかない。

悲劇のものは、^{はじめ}序に書いたように、道執と家執と権執との、三つ巴の格闘である。四十才になるかならずの若さで、伊勢の旅先で急死した元雅は、この格闘の渦の中で、芸術的生命を燃やし切った犠牲である。

世阿弥は六十才で出家したとき、元雅に大夫の座をゆずった。あれから十年、七十才のいま、元雅に先立たれて、親子恩愛の別れ、遣るかたなき思いである。老少不定とは知ってはいるが、自分のこととなると、思いのほかの心地して悲しみに堪えない。昔の人も、「ともに云うべくして云わざるは人を失う」（論語衛霊公篇）と訓え、「君ならで誰にか見せん梅の花」（古今集巻一）と歌っている。元雅は云うべき人であり、見すべき君であったから、すべてを相伝した。「子ながらも類^{たぐい}なき達人」「祖父にも越えたる

堪能であった。だから、秘伝奥儀をことごとく伝えたが、それがいまや、「一炊の夢」となり、「無主無益の塵煙」と化し、道の破滅の時節が到来し、悲しみに堪えぬ。孔子がわが子の鯉りに別れてかなしみ、白居易が先立った子の枕べに残る菓りに恨みの涙をながした、と聞くが、わたしも夢に子の幻をみて、離別の悲しさのあまり乱れた筆をとった次第であると記して、和歌二首を添えてある。

思ひきや身は埋木うもれぎの残る世に盛りの花の跡を見んとは

生くほどと思はざりせば老の身の涙の果てをいかで知らまし

『却来花』は元雅の死の翌年、永享五年春三月に書いた、『夢跡一紙』が悲痛の詩なら、これは未練の書ともいうべきもので、秘伝書中最後のものである。二跡（観阿弥と世阿弥）の芸道をすべて相伝しおわり、安心して自己の死を待つばかりというときに、元雅に死なれ、一座はいま破滅にひんしている。その口おしさ、未練さを筆にしたのがこの書である。次のように記している。

孫はいるが幼く、女婿の金春禅竹は将来性はあるがまだ未熟で、大成するまでわが命のほどもおぼつかない。しかし、亡くなった元雅も、禅竹以外に人はないと思ったのか、生前に秘書の一見を許したという。

さて、ここにいう「却来花」とは、五十以後になってはじめて、一期に一度だけ演ずることを許されるという秘曲で、わたし以外に知るものはない。元雅にも口伝だけで、別紙を与えなかったので、後世に名さえ残らぬのを惜しんで、せめてそういう名の秘曲のあったことを書きとどめておく次第である。世阿弥は未練をこう書いている。

鳥 跡 不 朽

『夢跡一紙』には、哀傷の響があり、『却来花』には、未練のこゝろ声音が聞かれるが、世阿弥最後の小謡集『金島書』には、すでにその哀傷も消え、未

秘 伝 書 哀 史

練も去り、格闘場裡の京^{みやこ}から遠くはなれた流配の地、北海に浮かぶ黄金の島の、わびしくもまた、ところ静かな日々のすがたを、若州・海路・配処・時鳥・泉・十社・北山という七篇の謡にうたいあげ、それに、毎年二月に猿楽者が集う南都興福寺の薪能を想いやって作った謡一篇が添えてある。義教の意に違^{たが}ったという理由で佐渡に流されて三年目、永享八年二月日の日付と沙弥善芳のサインがあり、奥書に和歌一首がある。

これを見ん残す黄金の島千鳥跡も朽ちせぬ世々のしるしに

ここにあるのは、すでに妄執を洗い去った、芸道への澄んだ思念と、不動の自信とである。

配流中、禅竹との間に文通があった。年次不明の世阿弥の手紙が一通現存している。それによると、禅竹が老妻の寿椿をひきとって扶養し、世阿弥にはなにがしかの料足（銭）を送りよこし、また、芸道について教えを乞うて来たのに対する返礼であることがわかる。配所の世阿弥にはどんなにかなぐさめになったであろう。世阿弥はまたねんごろに手をとるように教えを垂れている。この文の末尾に、次のようなことばがある。

京^{みやこ}では想像もできない片田舎のこととて、ろくな紙もないので、こんなそまつなもので、失礼をおゆるし下さい。しかし、考えてみれば、道の心がたしかならば、お経文のありがたい教えを、藁筆^{わらふで}でさえ書くということです。ですから、芸道のことを書いたこの手紙を、金紙とおぼしめし下さい。ゆめゆめ道をおろそかにせず、お守り下さい。

日付は六月八日とあり、恐々謹言、至芳として花押があり、金春大夫殿参と書いてある。

結 び

以上のような次第で、世阿弥の秘書の流伝は三つある。

第一は、長子元雅から越智観世家に伝わり、第二は、その一部が、元雅と世阿弥から、女婿禅竹に相伝され、金春家に伝わり、第三は、弟四郎（音阿弥元重の父）から、現観世宗家に伝統されている。

秘伝書奥書識語抜書

資料一 花伝書第三問答条々

およそ家を守り、芸を重ずるによて、亡父の申し置きしことどもを、心底にさしはさみて大概を録するところ、世の誇りを忘れて道の廃れんことを思ふによりて、またく他人の才学に及ぼさんとはあらず。ただ、子孫の庭訓を残すのみなり。

風姿花伝条々 以上

于時応永七年^{庚辰}卯月十三日

従五位下左衛門大夫 秦 元清書

資料二 花伝書第五奥儀云

およそ、花伝の中、「年来稽古」より始めて、この条々を注す所、またく自力より出づる才学ならず。幼少より^{このかた}以来、亡父の力を得て人となりしより、二十余年が間、目に触れ、耳に聞き置きしまま、その風を受けて、道のため、家のため、これを作するところ、わたくしあらむものか。

于時応永第九之曆暮春二日馳筆畢

世阿有判

資料三 花伝書第七別紙口伝

一、この別紙の口伝^{くでん}、当芸において、家の大事、一代一人の相伝なり。たとへ一子たりと云ふとも、不器量の者には伝ふべからず。「家、家にあらず、継ぐをもて家とす。人、人にあらず、知るをもて人とす」と云へり。これ万徳了達^{りようだつ}の妙花を極むる所なるべし。

秘 伝 書 哀 史

一、此の別紙の条々、先年、第四郎に相伝すると云へども、元次、芸能
堪人たるかんじんによて、是を又伝所也。秘伝々々。

応永廿五年六月一日

世〔花押〕

資料 四 花習内抜書序破急事

此本書、花習内、題目六ヶ条、事書八ヶ条也。此序破急段、事書内一ヶ条
なり。外見不可有。秘伝々々。

応永廿五年二月十七日

資料 五 音曲声出口伝

此条々、世阿心曲に及所私書也。外見あるべからず。

(以下は宝生英雄氏蔵本による)

応永廿六年六月 日

観世 世阿 判

音曲口伝之事御懇望之条、書進之候。世阿が態之音曲者当道只人ニモ只一
ツ也。然者、不残秘伝相伝申候也。

応永廿六年八月 日

観世 世阿 判

金春大夫殿 善竹ニ書遣之

資料 六 至 花 道

一、かやうの稽古の浅深の条々、昔は、さのみにはなかりしなり。古風
の中に、おのづからこのげいりき芸力を得たりし達人、少々見えしなり。その頃は、
貴人・上方様きじん じょうほうさまの御批判にも、是をのみ御覧じはやされて、非をば御讚談も
なかりしなり。当世は、御目も弥やい蘭たけて、少しきの非をも御讚談に及ぶ
あひだ、玉を磨き、花を摘める幽曲ならずは、上方様の御意に叶ふことあ
るべからず。さるほどに、芸の達人は少なし。当道いよいよ末風になるゆ
ゑに、かやうの習道疎おろそかならば、道も絶えぬべきかと、芸心の及ぶ所を、
おほかた申すのみなり。なほなほ、この外は、問人の器量もんじんの分力ぶんりきによりて、

相對しての秘伝なるべし。

応永廿七年六月 日

世阿書

資料 七 能 作 書

右，此一帖，息男元能^{もとよし}，秘伝^{する}と為所也。

応永卅年二月六日

世阿〔花押〕

資料 八 花 鏡

風姿花伝年来稽古より別紙至迄は，此道を顕花智秘伝也。是は，亡父芸能色々を，廿余年間悉^{たる}為書，習得^{しゆとく}条々也。此花鏡一卷，世，私に，四十有余より老後至まで，時々浮所芸得，題目六箇条・事書十二箇条，連続為書，芸跡残所也。

応永卅一年六月一日

世阿判

此一卷，世子，孫々家ニ伝，雖不可出他，道重心通冥慮則得此書。然者^{しかれば}，当流依^た為瑞骨，為道為家自写書所也。穴賢^{あなかしこ}穴賢。不可有他見。

永享九年八月 日

貫氏判

資料 九 六 義

応永卅五季三月九日

此一卷金春大夫所望依為相伝所也。

世阿〔花押〕

資料 十 拾 玉 得 花

此一帖，当芸習道之秘伝也。爰，金春大夫，芸能見所有依^す，為相伝所，如此。

正長元年六月一日

世阿〔花押〕

もしほ草かきをく露の玉を見ばみがくこと葉の花はつきせじ

資料十一 習 道 書

申樂^{いちえ}一会^{しゆどう}の習道，如此。

永享二年三月 日

為座中連人書。

資料十二 申 樂 談 義

右、三十一ヶ条、よも聞き違へたる事あらじと存^{ぞんずれ}ども、もし聞き違へることもや有るべき。心中^{しんぢゆう}ばかりの、なをざりならざりし所を見すべきばかりに、是を記す。御一見の後、火に焼きて給うべき者也。

たらちねの道の契りや七十^{ななそぢ}路^{おい}の老まで身をもうつすなりけん
はゝそ原かげ置く露のあはれにもなを残る世のかけぞ断ち憂き
棄恩入無為 眞実報恩者

立ち返り法^{みおや}の御親の守りとも引くべき道ぞせきな留めそ

永享二年十一月十一日

為残志秦元能書之

資料十三 却 来 花

この一卷、これは元雅口伝の秘伝なり。しかれども、早世なるに依て、後世にこの題目をだにも知る人あるまじければ、紙墨に顕はすなり。もしもしその人出で来たらば、世阿が後代の形見なるべし。深秘々々。

永享五年春三月 日

世阿〔花押〕

資料十四 金 島 書

これを見ん残^{こがね}す黄金の島千鳥跡も朽ちせぬ世々のしるしに

永享八年二月 日

沙弥善芳

The Tragical History of Zeami's Secret Papers

Kazuyoshi Nakayama

Résumé

This thesis is the history of the latter half of Zeami's life, and the tragic story of his secret papers, with which he initiated his successors into the secret.

The tragical events, in succession, have come from the conflicts among three elements as follows,—(1) the personal patronage of three persons of the Ashikaga Shognate, Yoshimitsu, Yoshimochi and Yoshinori, (2) Zeami's individual authority on the Nō-drama, (3) the tradition of initiating sons and pupils into the secret.

In his last years, his second son entered the priesthood, the eldest son died early death in his thirties, his grand son was left as a child, his company nearly collapsed, and he himself, at the age of seventy-two, was exiled on the northern solitary island, Sado-gashima.

In the latter half of his life, however, Zeami had left secret papers, about twenty volumes in number, which were what you would call his will. These secret papers have kept alive to this day during six hundred years since his death.

秘伝書年表

1. 諸家の研究を参照させていただいて作製した。
2. 元雅の年齢は推定である。
3. 表示しがたいことがらを、強いて記入したので、多少無理がある。
4. 秘伝のことを調べる便宜のために自家用に作ったもので、未定稿である。
(お気付きの点はご教示下さい)

西暦	和暦		干支	天皇		将軍	年				事件	伝書(手紙)	備考	
	南朝	北朝		南朝	北朝		世阿弥	元雅	元重	禅竹				
1333	元弘3	正慶2	癸酉	(後醍醐)	(光厳)5月	(守邦)								
1363	正平18	貞治2	癸卯	(後村上)	(後光厳)	(義詮)	1							
1368	23	応安1 2月18日	戊申	3月 長慶		12月 3代義満	6							

10				<p>。このころ結崎座大夫清次(観阿弥)醍醐寺にて7日間演能。京洛に名声を得、鬼夜叉も出演〔隆源僧正日記〕</p>	
12				<p>。南阿弥の推薦により清次京都今熊野にて演能。鬼夜叉も出演。義満はじめて観能、父子ともに認められる〔申楽談義〕</p> <p>。この後間もなく、清次観阿弥と名乗り、同朋衆となる。</p> <p>。11月鬼夜叉、奈良にて亀阿弥の田楽能を見て感銘を受く(あるいは翌年か)〔申楽談義〕</p>	
13				<p>。鬼夜叉、二条良基より藤若の名を授かる〔二条殿消息〕</p>	
16				<p>。6月7日藤若義満と同席で祇園会見物。『後愚昧記』(内大臣押小路公忠)、これを批難。</p>	

(後円融)

1372	文中 1 4月?	5	壬子
1374	3	7	甲寅
1375	天授永 1 5月 27日	1 2 27日	乙卯
1378	4	4	戊午

西曆	和曆		千支	天皇		將軍	年齢				事件	伝書(手紙)	備考
	南朝	北朝		南朝	北朝		世阿弥	元雅	元重	禅竹			
1381	弘和1 2月10日	永徳1 2月24日	辛酉	(長慶)	(後円融)	(義満)	19				。このころ藤若元服か、観世三郎元清と名のる。 。3月南阿弥(観世父子の理解者)没。		
1382	2	2	壬戌		4月 後小松		20						
1383	3	3	癸亥		10月 後龜山		21						
1384	元中1 4月28日	至徳1 2月27日	甲子				22				。5月19日父観阿弥駿河にて死す(52才)[常楽記] 。元清観世大夫となる		
1386	3	3	丙寅				24				。2月十二五郎(康次)ら興福寺新申楽に出勤(観世大夫の名代か)		
1392	9	明徳3	壬申		閏10月 南北朝合一		30						

1394	応永 1 7月 5日	甲戌		32	1	<p>。3月14日義満春日社参元清一乗院にて演能〔春日御詣記・兼宣卿記〕</p> <p>。12月義満太政大臣となり、將軍職を子の義持(9才)にゆずる。</p> <p>。このころ長子元雅誕生か、ほどなく次子元能も生る。</p>		
1395	2	乙亥		33	2	<p>。6月20日義満出家(法名、道義)</p>		
1396	3	丙子		34	3	<p>。このころ近江申楽の犬王、岩童ら京で活躍。</p>		
1397	4	丁丑		35	4	<p>。北山第(金閣)上棟</p>		
1398	5	戊寅		36	5	<p>。弟四郎の子、観世三郎元重(音阿弥)生る。</p>		
1399	6	己卯		37	6	<p>。4月29日元清醍醐三宝院にて演能。義満見物。〔迎陽記〕</p> <p>。5月20, 25, 28日 元清, 京一条竹鼻にて観進申楽, 義満見物。</p>		

12月
4代
義持

西曆	和曆	干支	天皇	將軍	年 齡				事 件	伝 書 (手紙)	備 考
					世阿弥	元雅	元重	禅竹			
1400	応永 7	庚辰	(後小松)	(義持)	38	7	3			。4月13日『風姿花伝』第3 まで成る。 。第4も次いで成るか。	
1401	8	辛巳			39	8	4		。このころ、元清、同朋衆 になり、世阿弥陀仏と称 す。		
1402	9	壬午			40	9	5		。3月2日『風姿花伝』第5 成る。		
1405	12	乙酉			43	12	8	1	。5月6日義満醍醐にて観 能、世阿弥出演か。 。金春氏信(禅竹・善竹)生 る(のち世阿弥の女婿)		
1406	13	丙戌			44	13	9	2		。このころ風姿花伝第6、第 7成るか。	
1408	15	戊子			46	15	11	4	。3月、後小松天皇北山に行 幸、崇賢門院御所にて能天 覧。		

1412	19	壬辰	8月 称光	50	15	8	15日世阿弥主演 22日犬王主演 〔北山行幸記〕 。5月6日義満没 (51才)		
				51	16	9	。5月近江申楽岩童, 嵯峨維野で三日間の勸進能。 。5月十二五郎康次, 四条河原で三日間の勸進能。 。11月世阿弥, 神託により伏見稻荷にて, 十番能。〔申楽談義〕		
1413	20	癸巳			20		4月田楽新座の増阿弥大炊御門河原で勸進田楽, 義持, この頃より田楽愛好。(以後1422年応永29年に至る10年間に毎年1回勸進田楽興行) 5月9日好敵手近江申楽の犬王道阿弥没。 。7月10日以降世阿弥京北野にて7日間の勸進能(以後応永29年まで観世座の演能記録殆ど見られず)		

西曆	和曆	干支	天皇	將軍	年				事件	伝書(手紙)	備考
					世阿弥	元雅	元重	禅竹			
1417	応永 24	丁酉	(称光)	(義持)	55	24	20	13	<ul style="list-style-type: none"> 8月義持奈良下向一条院にて観能 25日四座立合申楽 26日増阿弥の田楽 		
1418	25	戊戌			56	25	21	14	<ul style="list-style-type: none"> 1月義持, 弟義嗣を殺す 11月18日奈良一乗院にて四座演能. 	<ul style="list-style-type: none"> 2月17日『花習』のうち「能序破急事」抜き書きす. —これ以前に『花習』(『花鏡』の前身・初稿本)成る. 6月1日『風姿花伝』第7別紙口伝, 元次相伝(元雅の前名か) 	
1419	26	己亥			57	26	22	15		<ul style="list-style-type: none"> 6月『音曲声出口伝』成る. 8月『音曲声出口伝』禅竹相伝. 	
1420	27	庚子			58	27	23	16		<ul style="list-style-type: none"> 6月『至花道』成る 	

西曆	和曆	干支	天皇	將軍	年齢				事件	伝書(手紙)	備考
					世阿弥	元雅	元重	禅竹			
1428	正長 1月 4日 27日	戊申	7月 後花園	1月 18日 前々將軍義持没	66	35	30	24	<ul style="list-style-type: none"> 1月18日, 義持没(43才) 弟義円准后還俗し, 義宣と名乗り, 家を嗣ぐ. 4月18日, 5月21日, 元雅醍醐にて演能 7月17日. 元重, 十二五郎, 室町殿にて演能. このころ, 金春氏信(禅竹)世阿弥の女婿となるか. 	<ul style="list-style-type: none"> 閏3月9日『六義』金春大夫禅竹相伝. 5月14日, 『手紙』世阿弥より禅竹へ. 6月1日『拾玉得花』禅竹相伝. 	
1429	永享 1月 9日 5日	己酉		3月 6日 義教	67	36	32	25	<ul style="list-style-type: none"> 1月12日元重仙洞御所にて演能. 3月15日義宣將軍となり, 義教と名のる. 3月, 結崎(観世)座と円満井(金春)座と立合能. 4月18日, 元雅, 醍醐にて演能. 5月3日, 観世座(元雅・元重)と宝生大夫・十二五 		

1430	2	庚戌	68	37	33	26	<p>郎との立合能, 室町殿にて 〔満済准后日記〕</p> <p>◦ 5月13日, 義教, 世阿弥・元雅の仙洞御所への出入禁止.</p> <p>◦ 1月10日, 義教の命——仙洞申樂は元重が勤めるところ.</p> <p>◦ 4月12日義教の命により, 元雅清滝宮樂頭職罷免, 後任は元重. 〔満済准后日記〕</p> <p>◦ 11月11日 元能出家</p> <p>◦ 11月 元雅天川神社にて演能. 使用面奉納.</p> <p>◦ このころ元雅大和越智に引移る.</p>	<p>◦ 3月『習道書』成る.</p> <p>◦ 11月11日『申樂談義』(元能聞書) 成る</p>
1432	4	壬子	70	39	35	28	<p>◦ 1月24日, 世阿弥, 室町殿にて, 細川奥州家若党の演能指導, 世阿弥・元雅も各一番ずつ演能.</p> <p>◦ 8月1日, 元雅, 伊勢安濃津にて急死.</p>	<p>◦ 9月『夢跡一紙』成る</p>

西曆	和曆	干支	天皇	將軍	年齢				事件	伝書(手紙)	備考
					世阿弥	元雅	元重	禅竹			
1433	永享5	癸丑	(後花園)	(義教)	71		36	29	<ul style="list-style-type: none"> 。4月18日, 元重第4代観世大夫として清滝宮申楽演奏。 。4月21日より3日間, 元重, 糺河原にて勸進能。〔満濟准后日記〕 。10月後小松法星没(57才) 	。3月『却来花』成る。	
1434	6	甲寅			72		37	30	<ul style="list-style-type: none"> 。5月世阿弥佐渡流配〔金島書〕 。7月16日元重, 多武峯にて演能。 		
1435	7	乙卯			73		38	31		。6月8日(或は翌年か)『手紙』佐渡の世阿弥より弾竹へ。	
1436	8	丙辰			74		39	32	。1月28日元重室町殿にて演能。	。2月『金島書』成る。	
1437	9	丁巳			75		40	33		。8月貫氏(禅竹か)『花鏡』書写	

1441	嘉吉 1 2月 17日	辛酉	6月 義教死	79	44	37	<ul style="list-style-type: none"> 6月24日, 義教, 赤松満祐に誘殺さる (48才) (嘉吉の乱). 世阿弥この年赦されて帰るの説 	<ul style="list-style-type: none"> 6月禅竹『二曲三躰人形図』書写 (金春宗家に現存). 	
1442	2	壬戌	11月 7代 義勝	80	45	38	<ul style="list-style-type: none"> 世阿弥この頃帰るの説 		
1443	3	癸亥	7月 義勝没	81	46	39	<ul style="list-style-type: none"> 8月8日 (この年あたりか) 世阿弥没 [観世小次郎画像賛] (一説奈良金春家にて, 一説越智観世家にて) 		